

伊藤 仁斎 『童子問』 に学ぶ

十年前、師匠の越智直正が、つくづくと「わしに古典が無かったら、今のわしは無いなあ!」と語ったのが、今も私の脳裏から離れません。

人生に苦悶し、経営に行き詰まり、どうしようもない時に、古典の一行の言葉が、天から一条の光が差し込むように、前途が拓けて来る経験は、経営者なら一度や二度はあるものです。

おそらく、人類史上数千年に渡り先達は、我々が今、悩むレベルをはるかに超える大問題を一つ一つ、血を流しながら解決して来たはずです。

その解決策のエキスが“古典”として、綿々と現在に引き継がれているのです。

中でも今回は、「伊藤仁斎」の『童子問』に焦点を当てて学んでみましょう。

伊藤仁斎は、「朱子学」から「古義学」へ転換した江戸時代前期の儒学者です。

日常から遠く離れた抽象的学問は、ニセモノと、「論語」と「孟子」こそが、確かな古典であると断定しました。

数多ある古典や、当時の中心的学問である、朱子学をも否定したのです。

平成 23 年に亡くなられた、谷沢永一先生は『童子問』を「日本人の論語」と、高く評価されています。碩学、渡部昇一先生も「童子問に学ぶ」を上梓されています。

その『童子問』には、現代語にすれば、次のようなことが記されています。

“真理は高く遠いところではなく身近にある”

“論語はすべての真理を含んでいる”

“学問修業に近道はない”

“議論高遠な説は、ひねくれた私説である”

“最も尊い真理は知り易く行い易い” 等々、全 189 章あります。

いかがでしょうか？

まさに、我々社長が欲しているキーワードのオンパレードではありませんか！

能力の多くが「AI」に置き換わる時代が目前に迫っているだけに、“変化に対応する能力”や“人間力”に磨きをかけた中小企業が勝ち残れます。

社長、先月のコラムの「会社を塾に、社長が塾長に」を、単なる知識に終わらせず、実行し、「見識」に、更に「胆識」にまで、深めて参りましょう。

非常に、面白い、楽しみな時代に入ります。“大変”とは、大きく変わると書きます。大チャンスが、来ています！チャンスは、前髪で掴め！



今月のポイント

古典に未来を拓く鍵がある